

## 海外柔道ボランティア学生指導員 報告書

東海大学大学院 1年 飯田 正樹

### 1：目的

柔道を通じて、現地の人々との交流を図った。また、現地の人々と生活をともにし、異国の文化や風俗に触れ、日本の文化との違いを学び自分自身の視野を広げることを目的とした。



↑仙石道場

### 2：期間

2008年8月4日～9月3日にわたりインドネシア共和国・バリ島・仙石道場において、柔道指導を行った。



↑仙石先生と道場前にて

### 3：インドネシア・バリ島概要

#### インドネシア

- 【正式国名】 インドネシア共和国
- 【人口】 2億 1484万人(日本の約 1.9倍)
- 【面積】 190万 4569平方キロ(日本の約 5倍) 島の数が世界で一番多い
- 【首都】 ジャカルタ
- 【通貨】 ルピア Rp
- 【民族】 大部分がマレー系
- 【時差】 ジャカルタ 2時間
- 【言語】 インドネシア語
- 【気候】 乾季(4月～10月)・雨季(11月～3月)

#### バリ島

- 【人口】 約 312万人
- 【面積】 5532平方キロ(東京都の 2,5倍)
- 【宗教】 ヒンドゥ教 93% イスラム教 5% キリスト教 1%
- 【通貨】 ルピア Rp
- 【時差】 1時間
- 【言語】 インドネシア語・バリ語
- 【気候】 乾季(4月～10月)・雨季(11月～3月)

### 4：週間スケジュール

	午前	午後
月曜日	9：00～11：00 Judo	4：00～6：00 Judo
火曜日	9：00～11：00 Judo※	4：00～6：00 Judo
水曜日	9：00～11：00 Judo	4：00～6：00 Judo
木曜日	9：00～11：00 Judo※	4：00～6：00 Judo
金曜日	9：00～11：00 Judo	4：00～6：00 Judo
土曜日	9：00～11：00 Judo※	4：00～6：00 Judo
日曜日	Free	Free

- 月・水・金曜日(午前・午後) 中学生・高校生 (平均 20名～40名)
- ※火・木・土曜日(午前) 自主練 (数名)
- 火・木・土曜日(午後) 小学生 (平均 20名～40名)

週間スケジュールは上記のようになっている。しかし、宗教活動や村の祭りなどで休む子供も少なくない。基本的な練習は下記の通り。

## Judo

ウォーミングアップ : ランニング→しこふみ→ストレッチ→基礎トレーニング(腕立て・腹筋・背筋・握力・首・おんぶ・手押し車・馬跳び・寝技補強など)→受身→回転運動

基礎的な技の反復 : 足払いから踵返し・返し技まで幅広くの技を移動打込

打込 : 基本的に 100 本 (10 本×10 セット)

3 人打込 : 10 本終わったら、技に入った状態で端まで移動

綱上り : 小学生は 30 秒手の力で我慢・中高生は半分以上登る

乱取り : 3×3 本～5 本

寝技 : 2 分×3 本 (小学生) 3 分×3 本～5 本

## 5 : インドネシア・バリ島柔道事情

インドネシア・バリ島には 1 2 の道場がある (仙石道場を含める)。そこで多くの子供たちが柔道を行なっている。基本的に柔道の指導料は一切とっていない。また、柔道をした人いれば無料で柔道衣も配布している。このようにバリ島では柔道を行ないたい人がいれば、誰でも行なうことのできる環境になっている。インドネシアの一般市民は基本的に金銭的な余裕がない人が多い。その為、指導料や柔道衣代を取ることにすれば、柔道人口は激減してしまう。このように全てを無料に出来ているのはバリ島の柔道連盟が金銭的にも大きな負担をしてくれているからである。しかし、実際のところ、バリの柔道連盟には金銭的な負担をするお金はないのが現状である。柔道連盟の役員の方や道場のコーチなど、自ら連盟に寄付をしたりと、実費で連盟の活動を支えている。ただ、この方たちに金銭的余裕があるから寄付をしているのではない。バリ島柔道連盟の給料の平均は月 2 万円前後であり、そのような状況でも自分たちの食費を削ったり、借金をしたりしてバリ島柔道連盟の活動を自ら支えている (例 昼の輸送費 130 万円・選手の家賃・学費・食費の負担など大きな出費がある)。なぜ、そこまでしているのか?それは柔道という素晴らしいスポーツを通じて、インドネシアの子供たちに「教育」という財産を与えたいという願いからである。仙石先生も退職金などを使い道場を建てている。道場を建てたということは、これから先、多大な維持費がかかっていく。研修中にも畳の下に敷いていた板が腐り張替え作業が行なわれたりしていた。これを個人のお金だけで続けていくことは難しいことで

あるため、援助などといったことが大切になってくると考える。これが、現在のバリ島においての柔道事情の裏側である。

次は表面的な柔道事情についてだが、バリ島柔道の現在のレベルは日本と比べると決して高いとは言えない。仙石道場では練習時間は2時間（乱取りは3本～5本）で練習回数も週に平均3回と日本に比べると少ないものであった。しかし子供たちは日々、大きな成長をしていくのが見ていてははっきりとわかった。これは子供たちの持っている潜在能力・先生の指導を素直に受け入れることのできる場所・柔道が好きということなどが理由に挙げられるだろう（中には練習後のプールを目的にしている子供もいた）。仙石道場では基本的な技の反復は毎日行なっていた。小学生でも足技や背負投といった基本的な技から踵返しなどといったマニアックな技まで幅広くの技をかけることができる。柔道スタイルはしっかり組んで技をかけるという日本と同じスタイルが多かった。多くの子供は左右、技をかけられるように練習していた。これから練習を積んでいけば大きく伸びそうな子供も何人もいたので、とても楽しみである。

子供の試合でも国際ルールで、日本のように少年規定がないため日本で少年には禁止とされている両膝をついての背負投などが禁止されていない。また、昇段の規定も日本に比べて厳しいものである。インドネシアでは初段を取るのに五教の技すべて出来ないと合格できない。そのため、初段を取るのに何年もかかってしまう。やはり、帯の色が変わったり、級や段が上がることによって子供たちの柔道に対する意欲が変化してくると思うので、現在の規定を変え日本と同じ規定にするべきだと感じた。



↑子供と記念撮影（小学生）

## 6：ボランティア指導員として

### ① 良かった点

今回、私は学生ボランティア指導員として、インドネシア・バリ島に行かせていただきました。私自身、一人で海外に行くのは初めてということ・言葉・宗教のことなど不安な

ことは多々ありました。しかし柔道において、バリも日本も関係ありませんでした。柔道を通じて子供たちとコミュニケーションをとり、すぐに仲良くなることができました。柔道（スポーツ）は世界共通であることを再認識できました。ただ、海外で暮らすこと・生活を共にすることは簡単なことではないことも気付かされました。

例えば、宗教の問題です。バリ島ではヒンドゥ教が93パーセントを占めていますが誰もがどこかの宗教に属しています。そして、1日3回のお祈りは欠かすことはありません。しかも、自分が食べる分を削ってでも神にお供え物をするのが普通です。また、子供の頭を撫でてはいけないなど、日本では当たり前のことがバリ島では通用しません。日常生活においても、ご飯は手で食べる・トイレでトイレットペーパーはなく自分の手で洗うなど多くのカルチャーショックがありました。このような環境との出会いは日本には絶対になく、とても良い経験となりました。

そして、バリ島に1ヶ月いて気が付いたのは貧富の差でした。余るほどのお金を持つ人もいれば、市場で物乞いする人もいます。金がない人は学校にも行くことが出来ないのが現状で、大体の子どもは学校がないときは親の手伝いをしていました。また、学校に行っても先生や学校の数が少ないため、午前の部・午後の部に分けられたりと日本のような勉強をする環境は全く与えられていませんでした。このような状況を目の当たりにして、何不自由なく暮らし、大学院まで進んで勉強できていることや大好きな柔道を思う存分できる環境にあることがどんなに幸せか恵まれているかを直接、肌で感じることができました。

## ② 悪かった点

やはり、一番の問題は言葉でした。柔道指導においても細かい点を指導するときや柔道以外の場所で現地の人とのコミュニケーションをとるときにどうしても言葉の壁にぶつかりました。仙石先生と一緒にいるときは先生に頼ってばかりで、日本にいるときに言葉の勉強をもっとしておけばと強く感じました。やはり、子供たちと直接いろんな話をしたかったです。

また、歴史の面でも勉強不足でした。現地の人には生まれた地域から一歩も出ることなく一生を終える人も珍しくありません。そのため、日本人・日本という国について興味を持つ人が多かったです。日本はインドネシア共和国がオランダから独立しようとしたときに大きく日本が関係していたことなど日本とインドネシアの歴史をもっと勉強していくべきでした。



## 7: まとめ

現在、IJFに加入している国と地域は199カ国ありますが、ここまで大きくなるまでには大変な苦労があったと思います。異国の地における柔道普及は大変難しいものがあります。宗教の問題や考え方の違いなど、大きな壁がいくつもありました。特に金銭的な面では相当な負担があると感じました。これは日本との連携を深め、打開していかなければならない問題です。しかし、仙石先生のような方々の活動や柔道という素晴らしいスポーツに理解してくれた現地の方々など多くの人によって現在の柔道が支えられてことにも自分の肌で直接感じることができました。

今回の研修を通じて多くのことを学び、感じるものがありました。インドネシア・バリ島の柔道の現状や現地の人たちとの交流によって、今まで見えてこなかったものが多々ありました。その見えなかったものを見られたことによって、現在の日本の状況や柔道を客観的に見ることができ、私自身、視野がとても広がったと思います。

このような素晴らしい経験をする機会を与えてくださった山下先生をはじめ、温かく迎え入れてくれた仙石先生やバリ島柔道連盟の方々から心から感謝しています。また、バリ島に出発するまでの準備では東海大学柔道研究室の光本さん、小沢さんにも大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。